

駿河湾の深海魚 (12)
トゲスミクイウオ (その2)

久保田 正 ・ 佐藤 武

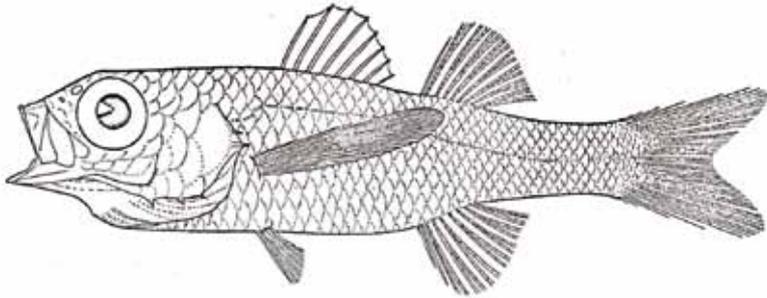


図1. トゲスミクイウオが最初に報告された時のスケッチ
(Parr, 1933より引用)

トゲスミクイウオ (*Bathysphyraenopus simplex*) は、ノルウェー生まれの海洋生物学者 Parr, A. E. によって 1933 年に新種として発表されました。その時の論文に描かれた本種を紹介します (図1)。日本近海から報告されているクシスミクイウオ科魚類は、トゲスミクイウオおよびクシスミウイウオ属の3種 (クシスミクイウオ、トゲクシスミクイウオ、ナミトゲスミクイウオ) を合わせて4種が知られています。これらの魚類は、タイ類やスズキ類と同じように櫛鱗 (しつりん) を有しています。図2は本種の体側にある櫛鱗です。

本種の生息水深は、駿河湾では夜間に60～150mの水層でサクラエビと共に混獲されていることから、昼間はより深い水層に生息し、サ



図2. トゲスミクイウオの鱗 (櫛鱗)
上方: 被覆部、下方: 露出部

クラエビと共に日周鉛直移動していることが示唆されます。さらに本種の小型の個体が湾内で夜間にプランクトンネットの曳網により、60m、140m、300m層からそれぞれ数個体が採集されています。

駿河湾内で行われているサクラエビ漁の混獲物中から本種が採れた当時 (1966～67年) は、国内で初めての出現であり、本種に関する情報は皆無でした。因みに、魚類学者で魚類図鑑を著わしている阿部宗明博士 (当時水産庁東海区水産研究所) の研究室の机の上に本種のホルマリン漬けた標本が同定できずに種不明のまま長らく置かれていたといわれています。当湾内では1970年代後半にサクラエビと共にたくさんの個体が混獲され、標本を入手することができましたが、近年サクラエビ漁でもなかなか獲れなくなり、まとまった標本の入手が困難となりました。

本種の餌生物について、1975～1979年の5年間の春季 (3～5月) にサクラエビ漁で混獲された472個体の胃内容物を調べたので、以下食性生態に関する知見を紹介します。餌生物は、フジツボ類の幼生、エビ類 (幼生類を含む)、オキアミ類、アミ類、カイアシ類など多くの甲殻類と毛顎類プランクトンであり、その食性は動物プランクトン捕食者です。その中でもカイアシ類の出現頻度は高く、それらの多い順に *Euchaeta*, *Oncaea*, *Candacia*, *Calanus*, *Pleuromamma*, *Microsetella*, *Scolecithricella* など10属以上が見られました。また、捕食率 $\{(\text{胃内容物重量} / \text{魚体重}) \times 100\}$ の頻度は0.001～0.100%の範囲に全体の63.4%を占めていました。中には0.7%を越える高い個体もありました。その平均は、0.116%でした。特に空胃の個体は皆無であり、すべての個体は、上記の餌生物と共にデトライトス状の物質 (有機物の破片などの沈殿物) を捕食しているという特徴がみられました。